

特集2
副教材
活用法

単語学習に「楽しさ」を 盛り込むワザあり！



武田 一

■ガラパゴス化している英単語集

英語の指導法は進歩し、色々なメソッドが成果を収めているらしい。

単語集に絞って言うならば、同義語を一気に覚えさせたり、逆に1単語1つの意味に絞って覚えさせたり、似たような単語 adapt, adopt などと一緒に覚えさせたり、接頭辞や語幹を意識するように主張するものや、例文にアニメキャラを登用したり、「試験に出ない英単語」と日本の英語教育を皮肉のようなものまである。

こういった様々なコンセプトを持つ単語集の存在は、学習者に「今度こそは興味を失わず続けられそう」という期待を持たせることを目的としたマーケティングの産物とも言える。そもそも、英語の学習が貧困からの脱出とは直接結びつきにくい豊かな社会である日本では、英語の学習には、動機づけと興味の継続という工夫が必要とされ、その結果、世界でも類をみないほど、バリエーティに富んだ単語集が存在し、英語関係の参考書売り場は、あたかも、携帯電話と同様、ガラパゴス化しているかのように思われる。

■学習者視点の『ジーニアス英単語2200』

私は『ジーニアス英単語2200』の編集に関わったが、その際に意識した視点は2つ。学習者の興味を引き続けるものであることと、指導者の扱いやすさということだ。

学習者、主に高校生が飽きないような工夫を随所に施している。これは、腹を抱えて笑うような例文を用いるということではなく、単語学習のお

もしろさを各自に発見してもらう工夫だ。例えば、adapt, adopt などの似たような単語は1ページ目と2ページ目に掲載し、「あれ？ 昨日やった単語に似ている？」と疑問を持たせ、学習者に敢えて前のページを確認させるようにした(p.64, p.66参照)。センターレベルの900単語が終わったところから、「語源でつかめ！」という接頭辞に注意させるコラムを設け、今までやってきた単語とこれから習う単語を接頭辞という視点で確認したり、推測する力を身につけるようにした。また、間違いやすい語法やコロケーションをGenius Pointとして、下段で二択で答えさせたりもしている。さらに、見出し語の右側に同義語を独立して記載しているので、見出し語から同義語、復習の際は同義語から見出し語と、確認しやすいレイアウトになっている。発見する楽しさと情報量が過多になることに配慮して、興味を持って反復学習しやすい工夫を施している。

■生徒、教師、単語テスト

英語科教員の立場からすれば、生徒たちの単語力をつけるために単語テストの必要性を感じつつも、単語テストそのものにおもしろさを求めることは難しい。一方、生徒たちにすれば、単語テストはつまらないものであり、単語集で覚えた単語に、単語集以外の場所で出くわす可能性が高くなければ、労多くして益少なしとなってしまふ。

『ジーニアス英単語2200』では、テスト範囲を指定しやすくするために、1ページの情報量を10ワードとし、また、センターレベル900語では、

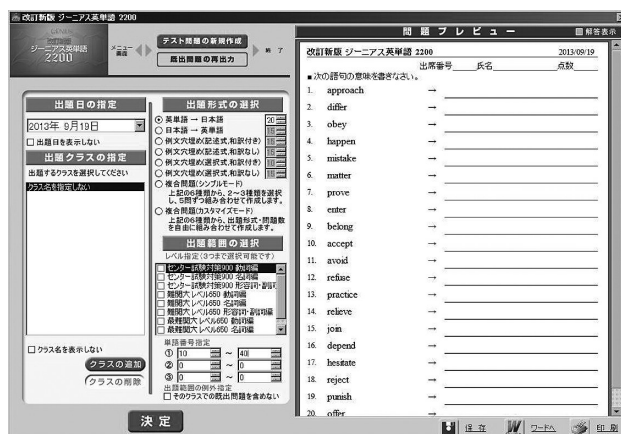
頻度の高い単語を選んだのは言うまでもないが、特に、文法を学習する際に取り上げられる語を多く掲載した。さらに、掲載する際にも、あえて連続させることはせず、ページを変えているので、授業中に注意された単語が単語集の複数ページにわたって続き、記憶に留めやすい。このように、1ページまるまる未知の単語を覚えるという苦行をいくらかでも軽減する工夫をしている。

■問題作成ソフトを使ってあげた成果

もちろん、『ジーニアス英単語2200』には、問題作成ソフトも用意されている。英語から日本語を、日本語から英語を書かせる問題に加え、例文を使って英単語を書かせたり、和訳させたりする問題でも、それぞれ選択肢のあるなしを選択できる。また、こういった問題を組み合わせる独自のレイアウトも施すことができる。

問題作成ソフトを用い、実際に本校で行った取り組みを紹介したい。従来は英語の授業の中で単語指導をしていたのだが、朝のホームルームを使い、小テストという形で行っている。小テストは回収し、英語科の教員の手だけでなく、他教科の教員の手も借りて採点をする。体育科の先生方の手も。10題中8点が合格。不合格の生徒は、ペナルティーとして、間違えた単語や例文を書き直してから、グラウンドへ飛び出していく。

英語科以外の教員も採点するし、また、毎日の作業となるので、少しでも採点しやすくするために、解答欄を手作りし問題の下段に設けることにした。一度解答欄を作ってしまったら、印刷の際に挟み込むだけとなるのでストレスとはならず、採点の効率化をはかることができた。教員は採点した後、一覧表に得点を記入し、担任に渡す。担任によっては、大きな表をクラスの壁に張り出し、10点の者には金のシールをつけ8～9点のものには銀のシールを貼って、生徒の意欲を高めている同僚もいる。1クラスにかかる採点時間はおおよそ



問題作成ソフト画面

15分。これだけのことではあるが、今年は、国立大学の現役合格者が20名を超えた。スポーツ校としての評価をあげてきたものの、国立大学には毎年10名前後の合格者を出すのみであった本校としては、初の快挙であり、今回の成果の一端が全職員をあげての朝の小テストの取り組みであったように思う。「まるを付け続けてよかった。」当初尻込みしていた体育科教員からもそんな声があり、報われた気分にもなった。

■単語集から飛び出したオリジナリティ

単語学習は一筋縄ではいかない。教員としての色々な角度からの生徒たちへの働きかけが何より重要だ。教科書で instruction が出てくればこんな話をする。

映画『スパイダーマン』で利用されたシカゴの電車の中で、こんな緊急時の警告表示を目にしたんだけど、と生徒に質問すると…。

Listen () instructions.

当然 to と答えが返ってくる。もちろん to でも正しい英語であるが、正解は for である。listen for で「耳をそばだてて聞く」となる。

こんな小ネタを集めながら単語指導が無機質にならぬよう楽しんでいきたいと思う。

(たけだ はじめ・埼玉県武南高等学校教諭)